

---

# 不思議な人たち

空跡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議な人たち

### 【Nコード】

N8606Z

### 【作者名】

空跡

### 【あらすじ】

高校生活に期待を寄せていた葵<sup>あおい</sup>。だが、現実<sup>まこと</sup>は違った。様々な人々と出会い、ちよつとずつ変わっていくお話。

憧れの女性（ひと）\*その1（前書き）

未熟者ですが、宜しければ読んでくれると嬉しいです！

## 憧れの女性（ひと）\*その1

期待ハズレの高校生活。結構期待していたのに普通だった。私が望んでいた高校生活というものは、アニメのような華やかなものだったのかもしれない。皆に好かれる人になりたかった。ヒロインになりたかった。こんな私になれるわけ無いと分かっていても。

入学して5ヶ月も過ぎていのにそんなことを思う私がいた。

「葵？」

「あ。はい」

急に名前を呼ばれて、少し驚く自分に「どうかしたの？ぼーっとして」と、微笑む彼女。この人は、私の思うヒロインに相応しかった。皆に好かれていて、可愛いし、運動も出来て、勉強も出来る。ショートヘアが似合う彼女。皆に笑顔を振りまいて、周りの人を幸せに出来るすごい人というイメージで頭がいっぱいで彼女をまともに見視出来ない。

「ちょっと、大丈夫？」

彼女は不安そうに顔を覗き込んできた。そして、おでこにかかる私の前髪をサラっと上にスライドさせて、額をぴったりとくつつけてきた。

「わ、だ、大丈夫！・・・結衣さん、近いです・・・」

「おっと、ごめんね。呼び捨てでいいって言ってるのになあ」

そう言って、につこり笑むとぴったりくつつけていた額を離れた。女子同士でも流石にドキドキするわけでした。顔が徐々に熱くなっ  
ていくのが分かった。

「ねえー！結衣ー！」

教室の隅に居る数人の女子が結衣に向かって手招きをしていた。

結衣は困った表情をしつつも、すぐに笑顔で対応すると、椅子から立ち上がって手招きされている方向へ向かって行ってしまった。残された私は次の授業の準備をするしかなかった。

たまに、寂しいと思う時があつたけど彼女は私を1人にしなかつた。なるべく隣に居てくれた。どうして隣に居てくれるのか理由は知らなかったが、彼女は私に『安心』をくれた。寂しい、という気持ちで溢れていた私の心は彼女のお陰で治まっていった。

そのせいかクラスにも慣れてきた。彼女以外の人たちも私に興味を持ってくれるようになり、少しずつではあつたが会話が多くなつていった。でも、男子は苦手。話すのは控えたいと思えた。

そんな生活が2ヶ月ほど過ぎていった頃。そろそろ冬を迎えようとしていた。

「どうかした？」

「私、どうしよう」

「何があつたか言つてよ」

放課後の教室から聞こえてきた結衣の声と知らない声の女子。今から教室に入るのはマズイと思つたので、すぐに立ち去ろうかと鞆を抱えたまま考え込んだ。

「葵……」

「ん？葵ちゃんがどうかしたの？」

私の名前が耳に入ってきて、ぴくりと反応してしまう。葵って私なのだろうか、それとも他の人なのだろうか。立ち去らなければいけない気がしたがあまりにも内容が気になつたので壁に背を向けて耳をすました。例え、悪い話でも良い話でもいい、と思つた。嫌いになられてもいい。私は彼女が友達として好きだった。

「……結衣？」

「ねえ、歩あゆみなら受け止めてくれる？」

不安そうな小さな声。隣にいるときに聞くような明るい、はきはきした声ではなかった。もっと小さな声。

「もちろん。私は結衣の親友だし」

歩という結衣の親友。親友にしか言えないこと？一体どんな話なんだろう……。

「葵が可愛くて仕方ないの！あんな妹欲しくて、誘拐しそうになっちゃった・・・」

「え」

声と同時に抱えた鞆をどさっ、と廊下に落とす。数秒して、教室から「え！」と驚いた高い声が響き渡った。

## 憧れの女性（ひと）＊その2

一体どうしたら良いのか分からず、どうしようかあたふたしていたところ、結衣と結衣の親友が私に近づいてきた。

「もしかして、聞いたちゃった？」

ちよつと頬を赤らめて私に訊く結衣。私は正直に頷いて、落とした鞆をまた抱えた。

「本人に聞かれてどうするの、結衣・・・」

ははは、と苦笑する結衣の親友は私の頭をぽんぽんと軽く叩くと、「結衣は可愛い子好きだよね。いつの日にか本当に小さい女の子を誘拐するんじゃないかとハラハラしているよ」とため息をつく。・・・どうなっているんだろう。誘拐？小さい女の子？

「しないってば！思うだけで！」

「あのね。受け止めてくれる？って訊かれなくても大体想像つくから・・・」

全く理解出来ないの、「どういうことですか」と頭に乗っている結衣の親友の手を退けた。

「どこから説明したら・・・」

「結衣、黙っててね。私、結衣の親友の宮原歩みやはらあゆみっていうんだけど、結衣って変態なんだよ。皆はまだ気付いてないだけで。ロリコンで変態だから」

宮原さんの説明途中で「ロリコンじゃない！変態じゃない！」と叫ぶ結衣がいた。完璧、結衣に対するイメージががりと変わってしまった。「ロリコン」「変態」。背中がゾクツと寒気がした。

「他の人には言わないでおいてね、かわいそうだから」

「・・・葵、ごめんね」

憧れだった女性むすめ。でも、あまり気持ち悪いとは思えなかった。結衣は結衣だ。イメージは変わったが、結衣のことを1つ知れた。皆が知らない結衣のこと。

「大丈夫、結衣は結衣ですから」

「とても良い可愛い子に出会えて良かったね、結衣」

「あ、うん・・・」

そう頷いた結衣は可愛かった。ちょっと照れてて、おどおどして  
いて。

「じゃあ、私は部活行って来ますね。またね、葵ちゃん」

「あ、あの、宮原さん」

「はい」

「やっぱり、なんでもありません・・・」

「ふうん？そっか」

「すみません、部活頑張ってください」

「はいよー」黒い長髪を揺らして教室から出て行ってしまつとド  
ア付近に残された私と結衣はお互いに黙って下を向いていた。

皆は部活に行つてしまつたようで、静かな廊下は足音1つ聞こえ  
ないくらい静か。私と結衣だけの空間。抱えていた鞆をぎゅっと強  
く抱きしめた。

「・・・葵、普通に接してくれる？」

「も、勿論です」

「ありがと、私も部活行つて来るね。変な空気にさせてごめん」

そう言つと立ち去つてしまった。私は振り返つて、駆け足で向か  
う結衣の姿をぱちくりさせながら見ていた。今思うと、彼女が美人  
なせいかとでもドキドキした。同性なのにおかしかった。

私は『読書愛好会』という読書をひたすらするだけの部活に入つ  
たのは良いが、部活に来ている人は限られた人たちばかり。部員数  
は20人くらい居るって聞いたことがあつた。所謂幽霊部員。

今日はいいや、と抱えた鞆を肩にかけて、本を取りに来たはずの  
教室を後にした。

意外にも翌日はお互いギクシャクしていなく、いつも通りだった。  
教室で見る彼女はやっぱり、憧れの女性むすめだった。



### 憧れの女性（ひと）\*その3

「葵、明日空いてない？」

ちよつと恥ずかしそうにしながら結衣が私に予定を訊いてきた。

「どうしてですか？」

そう訊いた瞬間、わたたと結衣が焦り始めて、更に頬を赤く染めた。

「いやっ、明日ね、部活オフだから葵と遊びたいなあーって思ってるね！そ、そんな変な意味じゃないからっ！？」

早口になったり、ゆっくりになったりするカミカミの言葉で説明してくれた。変な意味って、思った。頬を赤くして、私を見つめる結衣はかわいくて仕方がなかった。

「明日、空いてます」

真顔で答えると、即答で「マジ？」と私との距離をさらに縮めてくる。

「は、はい」

「明日、駅で待ってるね！」

「駅ってこの学校に近いほうなので良いんですね？」

「そうそう！駅に着いたらメールしてね。10時集合で大丈夫？」

「大丈夫です」

「じゃあ、明日、待ってる！部活行ってくるね」

「はい」

結衣がいつも通りに荷物を持って小走りで教室から出て行くのを見送る。まだざわざわとうるさい教室で、私は小声でお出かけかと呟いて、帰る支度を始めた。友達と何処かへ出かけるなんて何年ぶりだろう。中学1年生？いや、中学2年生？もつと前だったかな…。いつだっただろう。そんなことを考えていたら、部活で読書する気がなくなっていた。今日は部活はいいかな。

帰る途中、ガラス越しの洋服にふと目がいった。お出かけたの

が結構前なら、服とかそんなに無いかもしれない。ダンスの中は白と黒でいっぱいだったと思うし。

「買っておこうかな。せっかく結衣と遊べるんだし」

そして、お店に足を運んだ。

家に帰宅すると、お母さんがスリッパではたたと大きな袋を両手に持った私を見て、「おかえり。どうかしたの？」と不安そうな顔で私を見た。

私は「あ…ただいま。明日、友達と遊びに行くの」と靴を脱ぎながら笑顔で答える。

「そう。お友達と、お出かけ…。家に居るだけの葵が…」

「明日遊ぶんだから文句ないでしょう」

「うん、まあ。夕ご飯、早く済ませてね」

「はい」

スタスタとお母さんの横を通り、自分の部屋へ向かった。ご飯よりも、購入した服を着てみたかった。試着して購入したが、やっぱりもう一度着て確かめたい。

白と黒しか無かったこのダンスの中に青やベージュ、ピンクや赤の服が入ると思うと嬉しくてたまらない。

自分の部屋へ入り、急いで袋を開けた。可愛いスカートとブラウス。制服はハンガーにかけ、クローゼットへしまい込む。

履いたことのないひらひらでふわふわな白いスカートと紺色の生地には白いドット柄の入ったブラウス。鏡の前に立って、何度も見た。「こんな服装で大丈夫かな」

鏡の前でくるくる回り、何度も確認する。ファッションセンスはあまり良くないので、すごい不安だった。でも、不安より若干楽しみが勝っていた。

「きつと、大丈夫！」

もう一度、鏡に映る姿を見て確認し、部屋着に着替えて夕ご飯を済ませに下へ降りて行った。

## 憧れの女性（ひと）\*その4

翌日、待ち合わせ時間通りに駅に着いた。着いたのと同時に、携帯電話を鞆の中からごそごそと探していると何処からか「葵ー！」と私を呼ぶ声が聞こえた。周りを見渡すと、遠くからワンピース姿で笑顔で走ってくる女性を見つけた。私に手を振っている？目を細めて、その人物を確認する。・・・間違いない、結衣だ。

だんだんと近づいて来ると、はつきりと結衣と確認出来た。私もちよつと小走りで結衣の元へ向かった。

「ごめんね、もつと早くに着くかと思っただけだね・・・」

流石運動部。結構走ったはずなのに、息がまったく乱れていない。「あ、全然大丈夫です。それより、何処かに行きますか？」

「そうだね！近くに新しく出来た服屋があつたと思うんだ。そこに行かない？」

「はい！」

クリーム色のワンピースがとても可愛い。そのワンピースを着こなす結衣と一緒に歩いていると、私と歩くなんて勿体無いんじゃないかと思えた。

「葵、服可愛いね」

「えっ」

まさかの言葉に耳を疑う。聞き間違えかな。

「あ、いやっ！葵も可愛いんだけど・・・そのう・・・」

そう言っつて、下を向いてしまった。昨日みたいに頬を赤く染めて照れているのがすぐ分かった。

「結衣も可愛いです、そのワンピース」

「・・・あ、ありがとう、う」

何だろっ、可愛い。

「でも、葵には敵わないし・・・。私の中で葵は1番だし・・・」

「ええええ！ちよ、ちよつと、結衣、何を言っんですか！」

「私の中のランキング」

「ゆ、結衣？」

結衣が壊れかけてきている気がした。気のせいじゃないな、確実に。その本人は隣で両手を頬に当てて、「自分、何言ってるんだろ」と後悔しているようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8606z/>

---

不思議な人たち

2012年1月9日23時47分発行